

「科学する心」の伝承

伏見康治さんとお別れに思う

森 一久

「広領域教育」誌
2008.7.11

ご指導・お付き合いを頂いて六十年、遂にお見送りの一文を認める時がきた。

思えば1948年、私は、物理出身の科学記者第一号として厚かましくも、才気煥発、正に旬の物理学者大阪大学教授、日本学術会議第一期会員にも選出されたばかりの先生に付きまとい、西宮のお宅にもお邪魔していた。すでに「驢馬電子」などの名著や卓抜な解説文で、教育者さらに「啓蒙家」としても、誉れ高き先生に、科学雑誌「自然」の編集者になり立ての私は、社内での議論の渦中にいたので、未熟ながら真剣であった。

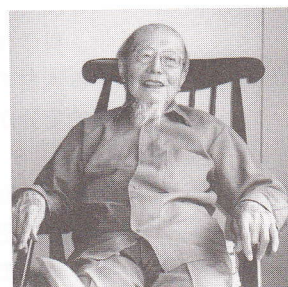
当時の先端の物理学では、およそ常識では律しがたい「科学的真理」が、次々と発見されており、それをどう説明して、若者にその魅力を感じさせるかについて、私は心を砕いていた。大まかに言えば二つの方法がある。例えば話（比喩）や図解を駆使して説明し、それで基礎物理等に魅力を感じるようになればよいと考える。もう一つは、丹念に実験や理論を、なるべく易しい言葉で簡潔に説明する手法。第一の方法は受け手のイメージや想像力に訴え、判ったと錯覚させるという側面があり、第二は「詰め込み教育」になり勝ちである。第三の道を模索していた私はその時、第一の道の達人の門を叩いたというわけである。

さて、広領域教育研究会は、畑山積氏が大御所の茅さんの強い支持で設立した。当時漸く表面化してきた環境やエネルギーの問題は、科学の諸部門に跨るテーマであり、およそ縦割り教育に馴染まない上に、さらにこれらの問題が、局所から地域、国、世界へと波及・拡大するは必然で、次世代教育の「広領域化」（総合化）を急げという事であった。活動は、研究会と「広領域教育」誌の刊行に止まらず多岐に亘り、問題を抱える「地域」に出かけて大討論会を開くなどもしばしば。伏見先生は何度か住民ぐるみの熱論に加わり、その悠然たる風貌で会衆を肅然とさせたのは今も記憶に新しい。

会長になられたのは平成7年、二代目会長小倉武一氏が、参議院議員の任期切れを待って、口説き落とされた。私はたまたま、その政党に出馬を口説かれた時、隣の部屋にいて直後に会ったというのもご縁、後に「森君も茅先生も（国会議員になるのを）止めてくれなかったの」と先生が吹聴されたのも、今は懐かしい思い出である。

「科学する心」の伝承 —伏見康治さんとお別れに思う—

森 一 久



お元気な頃の伏見先生
2004年5月（撮影：菅沼純一）

ご指導・お付き合いを頂いて六十年、遂にお見送りの一文を認める時がきた。

思えば1948年、私は、物理出身の科学記者第一号として厚かましくも、才気煥発、正に旬の物理学者大阪大学教授、日本学術会議第一期会員にも選出されたばかりの先生に付きまとい、西宮のお宅にもお邪魔していた。すでに『驢馬電子』などの名著や卓抜な解説文で、教育者さらに「啓蒙家」としても、誉れ高き先生に、科学雑誌『自然』の編集者になり立ての私は、社内での議論の渦中にいたので、未熟ながら真剣であった。

当時の先端の物理学では、およそ常識では律しがたい「科学的真理」が、次々と発見されており、それをどう説明して、若者にその魅力を感じさせるかについて、私は心を砕いていた。大まかに言えば二つの方法がある。例えば話（比喩）や図解を駆使して説明し、それで基礎物理等に魅力を感じるようになればよいと考える。もう一つは、丹念に実験や理論を、なるべく易しい言葉で簡潔に説明する手法。第一の方法は受け手のイメージや想像力に訴え、判ったと錯覚させるという側面があり、第二は「詰め込み教育」になり勝ちである。第三の道を模索していた私はその時、

第一の道の達人、伏見先生の門を叩いたというわけである。

さて、広領域教育研究会は、畑山積氏が大御所の茅誠司さんの強い支持で設立した。当時漸く表面化してきた環境やエネルギーの問題は、科学の諸部門に跨るテーマであり、およそ縦割り教育に馴染まない上に、さらにこれらの問題が、局所から地域、国、世界へと波及・拡大するは必然で、次世代ならびに成人教育の「広領域化」（総合化）を急げという事にあった。活動は、研究会と『広領域教育』誌の刊行に止まらず多岐に亘り、問題を抱える「地域」に出かけて大討論会を開くなどもしばしば。伏見先生は何度か住民ぐるみの熱論に加わり、その悠然たる風貌で会衆を肅然とさせたのは今も記憶に新しい。

会長になられたのは平成7年、二代目会長小倉武一氏が、伏見先生の参議院議員の任期切れを待って、口説き落とされた。私はたまたま、その政党に出馬を口説かれた時、隣の部屋にいて直後に会ったというものご縁だが、後に「森君も茅先生も（国会議員になるのを）止めてくれなかったのも、とんだ寄り道をしちゃって……」と先生が述懐されていたのも、今は懐かしい思い出である。

編集後記

- 近年、科学技術の細分化が進むにつれて、科学技術に対して総合的な見識を有する人材の必要性が叫ばれて来ました。巻頭言では、このことについて、具体的で分かりやすくご提言をいただきました。
- 「科学的リテラシーを育むこれからの理科教育」では、JSTの理科教育支援センターの取り組みや地域の小中学校の理科教員の人材ネットワークの構築等具体的に紹介いただきました。今後の理科教育の改善充実に寄与することを切に願います。
- 「“ともいき”という新しい生活観」では、21世紀を“自然と共生・融和・親和”の時代と捉え、今世紀を生きる人々の生活の知恵として、現行カレンダーと旧暦を組み合わせた新しい“ともいき暦”を紹介いただきました。
- 「原子力鐘は上野か」では、原子力平和利用の黎明期における『原子力基本法』成立過程の科学者の真摯な努力を紹介いただきました。伏見先生の原子力への熱い思いを偲ぶとともに、常に原子力平和利用の原点に立ち返ることの必要性を感じさせられました。
- 当研究会の会長をお願いしてきた伏見康治先生が5月8日に逝去されました。伏見先生は毎年1回開かれる当研究会の運営委員会にも度々ご出席になり、環境保全の重要性や子供たちに科学の面白さを実感させることの大切さを説いて下さいました。ここに伏見先生のご冥福をお祈り申し上げますとともに、当研究会も初心に立ち返って努力して参りますこととお誓いします。(E. T)

教育誌「広領域教育」活用のお願ひ

当研究会は発足以来、表紙裏に掲げた「設立趣意」に基づき、資源、エネルギー、環境、食糧、人口等の広領域の問題にかかわる情報と論議の場を提供するとともに、学校教育等への教材化に努めて参りました。

その活動の一環としての会誌「広領域教育」No.69を発行しましたのでお届けします。

できるだけ多くの方々目に触れ、われわれの意とするところをくみ取っていただけるよう念願するものです。

本誌は無料でお届けしていますが、当研究会の趣意・活動にご賛同いただける方には一口700円の賛助金をお願いできれば幸いです。その場合は、同封の振替用紙でお振り込みください。

広領域教育 No.69 平成20年7月31日発行
編集・発行 広領域教育研究会
〒105-0004 東京都港区新橋3-2-7 恭和ビル2階
幹 事 飯利 雄一（代表）・江田 稔（研究）
武井 英治（編集）・岸 勇（庶務）
電 話 03-5521-1347 FAX 03-5521-1348
印 刷 三美印刷（株）